

蒙古襲来絵詞を読みとく

橋本 雄（北海道大学）

発表要旨

鎌倉後期に起こった蒙古襲来(モンゴル戦争)に関する史料は、存外少ない。そのなかでも、その戦争に参加した肥後国(現・熊本県)御家人の竹崎季長{たけざきすえなが}が描かせたという「蒙古襲来絵詞」(宮内庁蔵)は、両度の戦争を活写した希有な歴史資料として知られる。つまり、モンゴル戦争の基本史料の一つとして、本絵巻は非常に重要な意味をもつ。

だが、この作品が現在の状態になったのは、江戸時代の寛政年間(19世紀初頭)の修理・成巻による。そして、この絵巻には錯簡や改変が多く、寛政の修理では少なからぬ補筆が施されたとおぼしい。普通なら一つだけの「奥書{おくがき}」(巻末の作成趣意書)が二つも存在するほか、料紙の種類も一貫していないなど、謎だらけの絵巻である。

したがって、本作品を歴史研究の俎上にのぼせるためには、まず周到な史料批判が必要である。絵画作品とは言っても、本絵巻はもとより実景を描写したものではない。本作品の現状から、ナイーブに歴史的事実を読み取ることも論外である。この絵巻を最大限活用するために、周到な史料批判が必要なゆえである。すなわち、本絵巻の成立にまつわる作成者の意図や目論見、原状の想像的復元など、近年のモンゴル戦争研究や絵巻そのものの研究の成果を踏まえて究明してみたい。

こうした作業により、モンゴル戦争の表象論への、汎アジア史的足がかりが得られれば幸いである。

略歴

1972年、東京生まれ。1995年、東京大学文学部卒業。2000年、同大学院博士課程単位取得退学。2004年、博士(文学)学位取得。

日本学術振興会特別研究員、九州国立博物館設立準備室、同学芸部研究員等を経て、現在、北海道大学大学院文学研究科准教授。

専門分野は、中世日本の国際交流史・文化史。

主な著作:『中世日本の国際関係』(吉川弘文館、2005年)、『中華幻想』(勉誠出版、2011年)、『偽りの外交使節』(歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、2012年)、『“日本国王”と勘合貿易 なぜ、足利将軍家は中華皇帝に「朝貢」したのか』(さかのぼり日本史:外交篇[7]室町、NHK出版、2013年)など。

発表要旨

日本の歴史学界におけるモンゴル帝国のイメージは、90年代以降大きく変わってきた。とりわけ杉山正明氏は一連の著作やメディアを通じ、モンゴル帝国イメージを刷新し、その影響は広く浸透しつつある。では国民レベルでのモンゴル襲来のイメージは、それがナショナルアイデンティティ強化に利用された戦前から今日までの間でどのように変わったのだろうか。洋画家矢田一嘯(1859-1913)のパノラマ画「蒙古襲来絵図」と最近の日本の漫画での描写を比較してみたい。モンゴル軍を描く画像・映像で目に付く特徴は、先進的な火薬兵器の描写である。特に近年は専門研究で、その時代に存在したことが証明されていないような種類の火薬兵器を、モンゴル軍がすでに実用化していたかのように描かれている。

モンゴルは中央アジア・ホラズム朝征服からバグダード進攻の過程で、堅固な城壁に囲まれた都市を攻略するが、その過程で様々な兵器を導入し、さらには南中国遠征に際しては、水軍も創設された。モンゴル帝国は中国やホラズムなど征服の過程で各地の様々な技術(と技術者集団)を吸収していったことが知られる。それは軍事技術においても例外ではない。本発表では、未解決の問題が多いモンゴル帝国の火薬兵器使用について今の時点でどのように評価できるのか、文献や考古学など様々な面から考察してみたい。

略歴

1974年11月21日、福岡県北九州市生。京都市在住。1993年3月、福岡県立京都高校卒業。1998年3月、大阪大学文学部史学科(東洋史学専攻)卒業。2001年3月、大阪大学大学院文学研究科(文化形態論専攻)博士前期課程修了。2003年～2005年、中国・北京大学歴史学系留学。2007年3月、大阪大学大学院文学研究科(文化形態論専攻)博士後期課程修了。2007年～2012年、大阪大学大学院文学研究科特任研究員。帝塚山大学(2007～2013年)、関西大学(2010～2013年)、甲南大学(2011～2013年)等非常勤講師。2013年4月～現在、同志社大学グローバル地域文化学部准教授。

主要著作:

「二章 モンゴル・シーパワーの構造と変遷 The Structure and Transition of Mongol Sea Power」『グローバルヒストリーと帝国 (Global History and Empire)』, 秋田茂 Akita Shigeru, 桃木至朗 Momoki Shiro 編 eds., 大阪大学出版会 (Osaka University Press), April-2013, pp.71-106.

「元代“朝貢”与南海信息 (The Tribute Trade in the Yuan Dynasty and Information about Nanhai Countries at Yuan Court)」『元史論叢 (Yuanshi Luncong)』10 (中国元史研究会 Zhongguo Yuanshi Yanjiuhui), July-2005, pp.389-406.

“The Interests of the Rulers, Agents and Merchants behind the Southward Expansion of the Yuan Dynasty,” 『吐魯番學研究—第三屆吐魯番學暨歐亞游牧民族的起源與遷徙國際學術研討會論文集— (Journal of the Turfan Studies: Essays on The third International Conference on Turfan Studies The Origins and Migrations of Eurasian Nomadic Peoples)』(上海古籍出版社 Shanghai Guji Chubanshe), May-2010, pp.428-445.

“‘Muslim Diaspora’ in Yuan China: A Comparative Analysis of Islamic Tombstones from the Southeast Coast,” *Asian Review of World Histories*, Vol. 4(2), July-2016, pp.231-256.

(http://www.thearwh.org/journal/ARWH_4_2_Articles/arwh_4_2_Mukai.pdf)

モンゴル・インパクトの一環としての「モンゴル襲来」

四日市康博（昭和女子大学）

発表要旨

13世紀から14世紀にかけてモンゴル帝国およびその継承政権はユーラシア各地を席卷し、その支配や影響は様々な地域や社会に及んだ。そのため、ユーラシアの東西では言語・宗教・民族など文化的な枠組みを超越したモンゴルのな共通様式が見られる。そのような経済的・文化的交流の背景として、モンゴルの覇権に伴う東西交通の安定を意味する「モンゴルの平和」Pax Mongolicaがあったと言われる。ただし、この概念はあくまでも一面的な見方に過ぎず、それだけで経済的・文化的交流の全てを説明できるわけではなく、ましてや、モンゴル覇権下のユーラシアで戦争のない平和な状態が享受されたことを意味するわけではない。モンゴルとユーラシア各地の文化圏や社会とは、時には衝突し、相克し、共存し、融合しつつ、多角的かつ重層的に両者の交流がおこなわれた。すなわち、ユーラシア各地において、いわゆる「モンゴルの衝撃」Mongol Impactがあり、そして、それに対する各地域や各社会ごとのレスポンスが存在したことを認識しなければ、交流の内容もその後の影響も理解することはできない。この場合の「モンゴルの衝撃」には、短期の政治的・軍事的なインパクトだけでなく、長期的な経済的・文化的なインパクトも含まれる。つまり、「モンゴルの平和」と「モンゴルの衝撃」は同時に存在する表裏一体的な概念であり、ユーラシア全体における「モンゴルの平和」を理解するためには、ユーラシア各地における「モンゴルの衝撃」とそれに対するレスポンスを知る必要がある。モンゴルから二度の侵攻を受けた日本は、世界でも最も古くから「モンゴル襲来」に対する研究が進められてきた。ただし、従来の研究は日本と元という2国間関係、或いは、それに高麗を加えた3カ国関係による外交・軍事関係という視点に基づいたものであった。モンゴル帝国＝元朝の対外計略は日本のみならず、ベトナム、チャンパー、ミャンマー、ビルマ、ジャワ、琉球、サハリンなど、海域アジア全域に及び、それらは必ずしも互いに無関係ではなかった。また、海域アジア各地における「モンゴルの衝撃」の影響はその後も長期的に持続してゆくのである。

略歴

1995年早稲田大学(第一文学部)卒業。2004年早稲田大学文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007年学位(博士(文学))取得。

2005/4-2008/3九州大学人文科学研究院専任講師(任期付)。2009年～駒澤大学文学部非常勤講師。2012年～早稲田大学総合研究機構中央ユーラシア歴史文化研究所招聘研究員。2014年～昭和女子大学国際文化研究所客員研究員。

専門分野はモンゴル帝国期における東西ユーラシア交流史、海域アジア交流史。

主な著作:『モノから見た海域アジア史――モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流』福岡:九州大学出版会,2008.3.

元朝諸皇帝の春・秋の狩りと昔宝赤・貴赤の役割に関する一考察

李 治安 (南開大学歴史院)

発表要旨

元朝各国はモンゴルの古いしきたりに従い、大都の郊外にある柳の林で春に放鷹して、秋に上都の近くにある東や西の涼亭や三不刺などで狩りを行う。後者は鷹狩と巻き狩りという二種類の狩り方がある。大規模な巻き狩りは世祖、成宗や英宗の時代にしか行われぬ。漢の昔宝赤鷹定籍が鷹の飼育、訓練と放鷹を担当し、オゴデイハン国時代に始まった。上都の近くにある昔宝赤鷹定籍の人々は主に興和路と察罕腦児に駐屯する。管領諸路打捕鷹房総管府、仁虞院と仁虞都総管府などは昔宝赤鷹房を統括するために朝廷によって設けられた機構である。「海西遼東鷹坊万户府」と「昔宝赤右手万户」はそれぞれ遼陽行省や黄河の中流と下流に駐屯する鷹坊戸を兵士とする。元王朝の半ばごろに、昔宝赤とそれに所属する鷹匠は愛馬(部)を形成し、そして文宗朝時代に急激に14024人まで増えた。愛馬は皇帝のケシクのなかにおいて一番大きなグループである。「マルコ・ポーロ」、ポール・ペリオのコメントと「元史・明安伝」などが同じ物を記載している。貴赤は徒歩に長けている。皇帝が狩りの行事を行う時に、貴赤は犬を連れて狩りに参加することを担当する。許有壬には次の詩がある。「人虽狗監知文士，世是鷹房袭小兒」は昔宝赤と貴赤などのような「鷹背狗」(狗の名前)係を見事にコメントする一句である。牧狩りはもともと草原で暮らす遊牧民を乗馬アーチェリーの軍事訓練に参加してもらう為に行われる。大多数のモンゴル人は鷹狩を最高の楽しみと栄光と見なす。両都巡幸制度に合わせて、春と秋に行われた狩りは元王朝の指導者が漢民族の文化をどのぐらい受け入れるかを反映する。武宗海山は中都を建設し、柳林の近くに「呼鷹台」を作った。それだけでなく、「三都一台」を目指し春と秋の狩りのために用意する宮殿を拡大し、モンゴル皇帝の四季宮殿のしきたりを復活させようとする。

略歴

1949年山西省太原市に生まれた；
1978年10月—1982年7月，南開大学歴史学部で中国史を勉強した；
1982年9月—1985年7月，南開大学歴史学部で修士課程に入り、中国古代史を専攻した；
1986年9月—1988年12月，南開大学歴史学部で博士課程に入り、中国古代史を専攻した；
1985年7月—1990年12月，南開大学歴史学部で就職し講師になった；
1990年12月—1993年12月，南開大学歴史学部で准教授になった；
1993年12月—今 南開大学歴史学部で学部長を担当した；
1997年7月—2000年10月，南開大学の図書館の館長を担当した；
2000年10月—2006年12月，南開大学歴史学院で院長を担当した；
2011年—今 南開大学歴史学院で教授になった。

朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の日本侵攻に関する叙述

孫衛国 (南開大学歴史学院)

発表要旨

元十年（1273）から元十九年（1282）まで、元の世宗フビライは二度にわたり日本に遠征軍を送った。二度とも失敗に終わったが、相変わらず近世東アジアの歴史における大事件であり、後世に深刻な影響を与えていた。高麗の軍隊が元の遠征軍にとって重要な援軍であり、重大な影響力を持っている。「高句麗史」と「高句麗史抜粹」など公式に編纂された歴史書において元の遠征が記載されたが、その事件に対する評価は大きく異なる。小論は歴史評価の視点から、朝鮮王朝が日本遠征に対する認識を検討し、歴史書物の編纂を左右する思想と文化面に於ける要素を検討する。

履歴

1966年の生まれで、湖南省衡東の出身である。武漢大学、南開大学と香港科技大学で勉強し、南開大学で歴史学の博士学位を取得し（1998）、香港科技大学で哲学の博士学位（2001）を取得した。今は南開大学で歴史学院の教授として活躍する。訪問学者として韓国の高麗大学、アメリカのハーバード大学のハーバード燕京研究所や台湾大学などを訪問した。主に韓国歴史、中韓関係史、中国史学の歴史や明王朝と清王朝の歴史を研究する。

出版した著書は「王世貞史学研究」（人民文学出版社、2006年）、「大明旗印と小中華意識：朝鮮王朝尊周思明問題に関する研究 1627-1800」（商務印書館、2007年）と「明清時期における中国史学が朝鮮に対する影響」（上海辞書出版社、2008年）である。翻訳著作は「中華人民共和国における明と清の歴史に関する研究」（魏斐徳など著、上海辞書出版社、2009年）や「世鑑：中国伝統史学」（伍安祖、王晴佳著、中国人民大学出版社、2014年）などである。国内外の出版物で百を超える論文を発表した。

「深簷胡帽」考

――蒙元とその後の時代における女真族帽子の盛衰史

張佳佳（復旦大学文史研究院）

発表要旨：

明太祖の洪武元年に発した「胡服」を改める詔令には、元の時代に流行っていた「深簷胡帽」も対象となっていた。蒙元時代の資料を総合的に考察すれば、鮮明な時代的特徴を持つ「深簷胡帽」は即ち「幔笠」のことだと判明する。「幔笠」はそもそも金の女真族の服飾であったが、後にモンゴル人に受け入れられ、さらに蒙古の遠征とともに中国、高麗、中央アジアないしペルシアにまで広がった。君主から大臣官僚、知識人、庶民に至るまで各階層で広く着用されていた。元明交代以後、「深簷胡帽」が漢民族の士大夫たちに、元の時代に中国がいかに胡化されたかの重要な象徴だとされ、たちまち歴史の舞台から退いた。朝鮮半島においても、高麗から朝鮮王朝への交代の際に似たようなことがあった。

「幔笠」は鮮明な時代的特徴を備えているが、これまでの蒙元服飾研究においては正確に理解されておらず、明の帽子との混同も見られた。「幔笠」に関する研究は、重要な図像資料の生成時代を明らかにすることができる。また、東アジアにおける「幔笠」の流行と消失は、かつて一世を風靡した「蒙古スタイル」の盛衰や、東アジア儒者知識人の「胡漢・華夷」思想の消長の歴史の一側面を物語っているといえよう。

略歴

1981年、山東省高密生まれ。北京大学中文系古典文献学学士（2004）、清華大学歴史系歴史文献学修士（2007）、復旦大学歴史系専門史博士（2011）、現在は復旦大学文史研究院副研究員。専門分野は元明の社会文化史。著作は『新天下之化：明初礼俗改革研究』（復旦大学出版社、2014年）；論文は『元済寧路景教世家考論』、『再叙彝伦：洪武時期的婚喪礼俗改革』、『別華夷與正名分：明初的日常雜礼規範』、『衣冠與認同：麗末鮮初朝鮮半島襲用「大明衣冠」历程初探』、『明初的漢族元遺民』等十数編。

日本遠征をめぐる高麗忠烈王の政治的狙い

金 甫 桃 (嘉泉大学)

発表要旨

モンゴル帝国の登場と拡散という世界史的な出来事は、モンゴルが高麗に進攻することで高麗にも大きな影響を与えた。モンゴルが高麗に影響を及ぼした期間は、「抗蒙」といわれる戦争期と「干渉期」という戦争後の時期に分けることができる。二度にわたって試みられた「日本遠征」は、干渉期に当たる。これは、モンゴルが高麗に日本の降伏を勧告するように招諭を要求したが、招諭が失敗に終わった後モンゴルが高麗を携えて直接日本征伐を推進させた征服事業であった。

これまで「日本遠征」は、モンゴルが主導し高麗は彼らに動員された戦争として理解する傾向が強かった。しかし、当時の高麗王(元宗および忠烈王)は、第1次遠征と第2次遠征の間に消極的な回避からより積極的な加担へと態度を変化させていることがうかがえる。本稿ではこの事件において当時の高麗王であった忠烈王が態度を変えた部分に注目してみたい。つまり、態度の変化に込められた忠烈王の狙い、政治的目的が何なのかについて調べてみたい。

13世紀後半、忠烈王の政治的な立場に対して、近年集中して検討が行われている。最近の研究の特徴の一つは、高麗をみる立場の変化である。つまり、高麗が一方向的にモンゴルによって動員されたという点を強調する傾向から抜け出し、この時期モンゴルの影響力が強く投射されている状況で、高麗または国王がこのような状況をどのように活用したのか、そしてその変化が高麗一モンゴル間の関係にどのように働いたのかという部分に注目している。

この過程で忠烈王の地位はとても象徴的である。彼は、高麗の国王でありながら、モンゴルと王室間の婚姻をした最初の国王であり、後には征東行省というモンゴルの地方最高単位の長官である丞相になった。しかし、モンゴルの「駙馬(貴人の娘婿)」としての地位、またはモンゴル王室との婚姻は高麗が先に提案した内容であり、「征東行省」はモンゴルが設置したにもかかわらず忠烈王は、行省内で自分の役割も要請した。言い換えれば、高麗王つまり忠烈王は、モンゴル帝国の威勢を借りて王権を確立し、権力を強化しようとする方向からモンゴルの駙馬、丞相という要素を通じて政治的な効果を期待した。

1170年から100年間続いた武臣政権時代に高麗の王権は弱化し続けた。1270年に武臣政権が崩壊し、王政が復古したが、すでにモンゴルとの関係の進展により高麗の様々な既存の体制に変化が現れた。すぐに忠烈王とクビライの娘「忽都魯揭里迷失(後の「莊穆王后」)」との婚姻のように高麗とモンゴル間で王室婚姻が成立し、中書門下省と6部中心だった高麗の官制は僉議府と4司体制となることで、官制もモンゴルの要求によって格下げ、改編された。そして、ダルガチのようなモンゴルの官職や軍隊が高麗に常駐した。こうした状況の変化は結果的に高麗の王権を安定・強化させる要素を再設定するように強要するようになった。

そして、モンゴルは使臣の趙良弼を日本に送り降伏を勧告させ、外交的な接触が失敗に終わると戦争を準備した。使臣の派遣や2度にわたる戦争において、高麗は全面的にモンゴルに協力した。第1次遠征当時、高麗は1274年に高麗は30,500人を徴発し、900隻の船を建造し、高麗軍6千人、水夫6,700人が動員され、1281年の第2次遠征当時は戦艦900隻、軍事1万人、水夫17,000人を動員した。こうした莫大な人的、物的負担に高麗は深刻な困難を経験し、負担の重さを幾度もモンゴル王朝に訴え出た。

こうした政治的な部分、特に忠烈王にフォーカスしてみると、経済的な負担に対する高麗側の訴えとは違った脈絡が垣間見える。忠烈王は、遠征準備の負担を訴えながらも日本の遠征に対して反対はしなかった。時にはそれに応じる姿すら見える。特に、第1次遠征当時、モンゴル軍と高麗軍の指揮層の混乱像を敗戦の原因として指摘し、第2次遠征においては指揮

層の統一性を強調した。そして、そのため高麗側の武官たちを万戸職に任命、金牌賜與など、モンゴル式の官制による指揮権を認めてくれることを要請したりもした。これにモンゴルは、忠烈王の要請を受け入れ、さらには高麗王、つまり忠烈王を征東行省丞相として任命した。これにより高麗王が行省の丞相を兼任する始まりとなった。

ここで忠烈王が目した部分は、次の三つである。第一に、日本遠征事業に対するモンゴルの強力な意志を王権強化に活用するため、忠烈王は、モンゴルの風習や制度に対する部分を強調した。すぐに、モンゴルの支配層の一員である「駙馬」の義務を強調し、モンゴルが自分に指揮権などを認めさせる名分を提供した。二番目に最初の部分の延長線上でモンゴルに対して指揮権を要請し、これを高麗の將軍たちに適用することになることで、高麗軍はモンゴル軍との一元的な指揮体系を構築することができた。何よりも高麗軍をモンゴルの軍事制度である「万戸」で自分が事実上「任命」できるようになった。三番目に、指揮権に対する忠烈王の要請をモンゴルが受け入れ、それに忠烈王を行省丞相に任命することで、モンゴルは高麗王の役割を認めた。

結局、日本遠征を準備するプロセスの中で、忠烈王はこのプロセスを自分の王権強化に利用しようとする狙いを持っていたと言える。そして、その狙いは忠烈王が丞相となる時点で、ある程度所期の目的を達成したと評価できる。

略歴

主要 経歴 :

- 2012.05.-2014.02. 高麗大 韓国史研究所の研究教授
- 2014.03.-2016.02. 高麗大 BK21PLUS 韓国史事業団の研究教授
- 2017.03.-現在、嘉泉(カチョン、Gachon)大学 Liberal Arts College 助教授

主要研究分野 :

- 高麗の政治制度、権力構造などに関心を持っている。
- 高麗成宗、懸鐘台太祖配享功臣の選定過程と意味(2014)
- 高麗前期、魚袋の概念と運営方式に対する検討(2015)
- 高麗、モンゴル関係の展開とダルガチの置廃過程(2015)
- 高麗の対蒙対応論理と「大国イメージ」-1231、1232年の外交文書を中心に-(2015)
- 高麗前期、公服制の整備過程に対する研究(2016)
- 高麗内のダルガチの存在様相と影響-ダルガチを通じたモンゴル支配方式の経験-(2016)

原著：韓国語、翻訳担当：李恵利

対蒙戦争-講和の過程と高麗の政権をめぐる環境の変化

李 命 美 (ソウル大学)

発表要旨

モンゴルとの戦争と交渉、また講和に至る過程は、高麗のなかで政権を掌握していた 武臣政権が終わり、王権が回復されていく過程と連動していた。本発表では、このような過程にみられる高麗王権-政権をめぐる政治-外交的環境の変化について検討してみたい。

以前の高麗の外交-交渉相手とは違い、モンゴルは遊牧国家としての周辺との関係形成を戦争の時期から講和の段階に至るまで持続的に強く要求してきた。30年から40年にわたる戦争と交渉の過程において、高麗側はこのような要求にそのまま応ずることはなく、そのときの状況に応じて対応した。その結果の一つとして挙げられるのが高麗宗室の外交的-政治的活動であった。このような様相は、政治単位的首将間の直接的な対面やそれを含めた個人間-家門間の関係を重視したモンゴルの関係形成の在り方と関連したものであった。高麗王朝体制において太子を含む宗室は、その政治的-外交的活動が表面に表れることは殆どなかったが、モンゴルとの戦争を期に浮き彫りになった高麗宗室の活動の様子は、戦争が終わってからも続き、高麗-モンゴルの関係、及びその中での高麗国王権をめぐる環境の変化をもたらした。

一方で、高麗-モンゴル間の「完全な」講和に至る過程は、高麗の元宗が武臣執権者であった林衍により廃位され、再び復位される過程と重なっているが、この過程もまたモンゴルとの関係による高麗王権をめぐる状況の変化の一面をみせてくれる。既存の東アジア国際秩序の中において、高麗国王は中国皇帝の「冊封」を受けていたが、それは事後的な性格が強いものであり、実際に高麗国王の即位と退位(あるいは廃位)は高麗の内部事情によるものであった。しかし、世子(以後、忠烈王)の請婚(求婚)と請軍が受け入れられ、軍を帯同したモンゴルの詔使が派遣されることになると、高麗王権は「実質的な冊封」と「皇室との通婚」という二つの関係を通じて皇帝権と直接つながることになった。それは既存の国家間関係の形で存在していた「冊封」が実質化していく変化であると同時に、モンゴルにおける政治単位間関係を媒介-維持する重要な形式であった通婚という家門間関係形成の形が、高麗-モンゴルの関係にも適用されることになる変化である。それは、相互に関係しながら高麗王権をめぐる環境の変化をもたらしており、このような変化は、以後、高麗-元の関係のなかで発生する様々な政治的事件を誘発した構造的な変化であったと言える。

略歴

ソウル大学の国史学科で学士、修士、博士学位を取得する。修士学位論文のテーマは、「高麗-元の王室通婚の展開と特徴」、博士学位論文のテーマは「高麗-モンゴルの関係と高麗国王の地位の変化」である(2016、『13~14世紀における高麗-モンゴルの関係研究-征東行省丞相駙馬高麗国王、その複合的地位に関する探究』へアン)。ソウル大学歴史研究所、奎章閣韓国学研究院などを経て現在は人文学研究院の研究員として活動中。国家間関係(東アジアの関係形成方式)と個人間-家門間の関係(モンゴルの関係形成方式)が高麗-モンゴル間の関係のなかで影響し合う様子やそれによる高麗末の政治-社会変動に関心を持って研究している。

14 世紀におけるモンゴル帝国の食文化の高麗への流入と変化

趙 阮(漢陽大学)

発表要旨

13 世紀のモンゴル帝国建国以来、大規模な移動が起こり、その後、各地域で文化交流が行われた。文化的な接触や刺激、変化は、モンゴル帝国時代の物質文化の領域の中でも、食文化に大きく反映されている。13 世紀、モンゴルがユーラシア大陸を征服後、各地域でモンゴルの皇帝に食事をもてなし、14 世紀には帝国の中心部で食文化の多様化や融合が見られた。食文化の変化は、帝国の中心部から次第に周辺地域にも広まった。1260 年モンゴルと高麗の和親締結後、高麗に仏教で禁止されていた肉食文化が流入した。

朝鮮時代は、仏教の衰退とともに茶に代わる飲み物が発達した。14 世紀『飲膳正要』に紹介されていた清涼飲料水の舎兒別の調理に関する知識が、17～18 世紀朝鮮後期の日常生活書である『山林經濟』と農書『林園經濟志』に渴水として紹介されている。本発表では、モンゴル帝国の食文化の多様化と高麗地域への流入の過程を検討し、朝鮮半島で起こったモンゴルの食文化流入の跡を辿りながら、13 世紀のモンゴル帝国が拡大する中で現れたモンゴル帝国のグローバル現象の特徴とその意味を見ていく。

略歴

漢陽大学史学科(学部)を卒業し、中国の中央民族大学で 16 世紀モンゴル研究で修士学位を取得した。以後、北京大学歴史学科に進学し、「蒙元帝国期におけるダルガチ制度の研究」で博士学位を取る。ソウル大学歴史研究所では、「17-20 世紀蒙元史研究に表れる清の知識人のモンゴル帝国認識」というテーマで博士後研究課程(Postdoc)の研究を進めたこともある。漢陽大学比較歴史文化研究所の HK 研究教授を歴任。現在、漢陽大学や世宗大学で講義している。専攻分野は蒙元史。モンゴル帝国期の統治制度や周辺地域との文化交流、清代の史書に反映されたモンゴル帝国に関する認識などについて研究中である。

主な論文としては、「大元帝国のダルガチ体制と地方統治-ダルガチの掌印権と職任を中心に」(『東洋史学研究』2013/12)、「明人の目線からみた 16 世紀漠南モンゴル社会の変化」(『モンゴル学』2014/6)、「フビライ期の江南地域における色目人の任官と活躍 -江浙行省地方官部の色目人官員の事例を中心に-」(『中央アジア研究』2014/12)、「大元帝国時期の孛蘭奚(Bularqu)民と元政府の官吏政策」(『中央アジア研究』2015/6)「17-20 世紀蒙元史研究に表れた清知識人の「モンゴル帝国」認識-「元史類編」、「元史新編」、「新元史」を中心に-」(『中国学報』2015/12)などがある。

北元と高麗との関係に対する考察 - 禡王時代の関係を中心に -

チェックメッド・チェレンドルジ Tsegmed Tserendorj (モンゴル社会科学院歴史研究所)

発表要旨

明に首都を奪われ北への撤退を余儀なくされた 1368 年から 1388 年までの元を「北元」と呼ぶ。北元の時期は、中元の覇者がはつきりせず、情勢がどのように変わるか予断を許さない過渡期的な時期であった。

北元と高麗の関係は、大きく「公民王時代の関係」と「禡王時代の関係」という二つの時期に分類することができる。公民王時代には元と明が角逐をしている隙をみて高麗は自主性を強化させる政策を行なった。1369 年、公民王政権は、元との関係を断絶し、明と事大関係を構築した。それだけでなく、元の領土を征伐するなど、敵対的な態度を示した。公民王のこうした処置はあまりにも性急な判断であった。そうしながらも公民王は、事実上北元とも関係を完全に断ち切れず両端関係を結んでいた。

1372 年を前後に北元は、内外の安定を回復させ、高麗に対する外交活動も活発化した。しかし、公民王が親明政策を頑なに固守したため、高麗に対する懐柔政策は失敗した。

公民王を継承した禡王時代から高麗と北元関係には大きな変化が見られた。高麗は、ただ明と事大関係を維持するだけでなく、一時期国交が断絶していた北元とも関係修復を試みた。しかし、このような試みは反対勢力の猛烈な反対により、紆余曲折の末、やっと達成された。

高麗の北元との関係再開は、公民王の一方的な外交政策を修正し、明をけん制しようとする北元と高麗の実質的な必要性から始まった当時東アジア勢力バランスを維持しようとする努力の結果であった。

本稿では、禡王時代の北元と高麗との関係の推進過程、そしてこの関係が当時東アジアの歴史に及ぼした影響及び結果に関して全体的に検討してみたい。

略歴

1999 年 モンゴル国立ウランバートル大学卒業

2010 年 大韓民国韓国学中央研究院博士課程卒業。文学博士 (歴史学)

専攻: 中世韓-蒙関係史

主要著作:

1. Chinggis khan (encyclopedia), co-author, Ulaanbaatar, 2006
2. Encyclopedia of history and culture of the Mongols /co-author/, Ulaanbaatar, 2004, 2006
3. History of the Yuan dynasty /元史/ (A Mongolian translation from Chinese by Ch. Dandaa), Volume I-XII, Foreword and textological study by Ts.Tserendorj, Ulaanbaatar, 2003
4. Saran-u gerel /Moonlight/. Biography of Zaya bandita of Oirat (Textological study, foreword and index by A.Ochir and Ts.Tserendorj), Ulaanbaatar, 2008
5. Iltgel shastir /欽定外蕃蒙古回部王公表伝/, Chapter 1-44, (Transliteration from Old Mongol into Modern Mongolian and comments by Tsegmed Tserendorj and others), Ulaanbaatar, 2007
6. Manchu Veritable Records /満州実録/ (Transliteration from Old Mongol into Modern Mongolian and comments by Tsegmed Tserendorj), Ulaanbaatar, 2009
7. Ogeled-un noyad-un ug eki /Origin of Olet noblemen/, (Textological study, foreword and index by Ts.Tserendorj), Ulaanbaatar, 2010
8. Samguk yusa (三国遺事)” (translation from Korean into Mongolian with J.Gantulga), Ulaanbaatar, 2009
9. Yangban- The ruling class of Korean traditional society, Seoul, 2013
10. A study on a royal mausoleum of ancient nomads, Ulaanbaatar, 2013
11. Parhae-ko (渤海考), (translation from Korean into Mongolian), Ulaanbaatar, 2014
12. Khubilai Khan and his succesors, Ulaanbaatar, 2015
13. 東西文化交流とアルタイ // アジア学術研究叢書 7 / アルタイ学シリーズ 3 : 亦楽、2016 (共著)

原著: 韓国語、翻訳担当: 李恵利

フビライが日本に送った命令文の内容・形式に関する比較研究

朝克图 (内モンゴル大学)

発表要旨

13世紀中旬、フビライは元朝を建てた後、1266年、即ち至元三年から日本と交渉し始め、日本と外交関係を結ぶために、日本へ六回にわたった使節を派遣し、いくつかの命令文を渡した。これらの命令文は漢文で書かれており、それらのいくつかは、本文が伝存しており、その内容と形式をある程度知ることができる。他国に命令文を出すことは、モンゴル帝国が拡大し、世界的な大帝国に発展する過程において、他の諸国・諸地域と交渉する時に採用する一つの外交手段であるが、それらの命令文には、モンゴルが世界を支配する理由と、モンゴルの支配に従わないものに対する制裁措置が強調されている。モンゴル帝国の命令文は、様々な言語で書かれ、世界各地に数多く残っており、モンゴル帝国が拡大した歴史と経緯を理解するために極めて貴重な一次史料となっている。モンゴル帝国時代の命令文に関する研究は既に行われているが、モンゴルが日本に渡した命令文を、モンゴル帝国が他の諸国・諸地域に与えたさまざまな命令文と、網羅的に比較して分析・検討する研究は、未だ十分には行われていないようである。そこで、本報告では、フビライが日本に渡した命令文を、モンゴル帝国が他の諸国・諸地域に渡した命令文と比較することを通じて、モンゴル帝国が世界を征服する過程において、日本遠征がどのような意味を持つものであったか、という問題について分析することを試みたい。

略歴

1963年内モンゴル自治区シリングル盟正藍旗に生まれた。

1980年9月-1984年7月内モンゴル大学蒙古言語文学学部に通学した。

1984年7月から内モンゴル大学蒙古言語文学学部で助手として働いた。1985年3月-1987年1月北京大学当方言語学部でペルシヤ語を勉強した。

1993年9月-1997年6月内モンゴル大学蒙古歴史研究所で修士課程に入り、女真語を専攻した。

1997年6月-1998年3月日本富山大学の文学部に外国人研究者として滞在した。

1998年4月-2000年3月に早稲田大学大学院文学研究科で訪問学者として研究を行った。

2000年4月-2006年7月に早稲田大学大学院文学研究科で博士課程に入り東洋史を専攻した。

2006年8月から内モンゴル大学蒙古学学院に就職し、2007年に副教授に昇進し、2012年に教授となった。

主な研究成果:

『チンギス・ハンの法』著作 山川出版社。2010年。

このほか、1990年代から今までモンゴル帝国、元朝歴史に関する学術研究論文を三十篇以上発表した。